

台湾文明の 確立を目指して

石井 公一郎 いしい こういちろう
● 本会副会長
元ブリヂストンサイクル社長



石川公一郎副会長

トインビーやハンティントンは、世界の文明を一桁台の数字に区分けして論じているが、諸民族が持つ特異性を顧みるならば、もっと細く分類するのが妥当ではなからうか。

台湾は、独自の文明圏を形成する資質を充分に備えていると私はかねてから考えているが、ここでその理由を、やや廻りくどい論法で説き起こすことにしよう。

戦争とそれに伴う占領は、世界史のなかで長く語りつがれねばならないテーマである。被占領は短期的にみれば悲劇以外のなにものでもないが、長期的視野に立って検証するならば、必ずしもそうとは言えない面がある。

世界史のなかから二つの事例をとりあげてみ

よう。

スペインは八世紀のはじめから先進文明国イスラームに占領され、長期にわたってその支配下に置かれた。それをね返すカトリック勢の主権回復運動（レ・コンキスタ）が顕著になったのは、十三世紀に入ってからであり、イスラームの最後の拠点、グラナダが落城したのは十五世紀の末ごろというのだから、歴史に残る長期占領だったといえよう。

ところが、それから、百年余りのうちにスペインはみるみるうちに国力をつけ、世界のすみずみまで影響をおよぼす大帝国になった。

もう一つの例をあげよう。

イギリスは十一世紀の中ごろから、三百年にわたってノルマン人（フランス北部に定住した

北方種族)の占領下に置かれた。世にいう「ノルマン・コンクエスト」である。イギリス国王は排除されてノルマン人の国王がかわり、公用語もフランス語になったというのだから、イギリス人にとって屈辱に満ちた日々だったに相違ない。

しかしその後、ノルマン王朝が大陸との関わりを放棄してイギリス化していくうちにイギリスは、かつてない繁栄期を迎えることになる。フランスの先進文明と土着文明が融合したからである。外国系の国王による権力乱用を防ぐために制定された「マグナ・カルタ」をはじめとする議会制度の発展は、世界史のなかでイギリスを民主主義のリーダーの地位に押し上げる結果を生んだわけだが、これも「ノルマン・コンクエスト」の副産物だったといえよう。

話を台湾に戻して、生成の跡を回顧してみよう。

一六二四年、オランダは台湾を占領し、植民地化をはかったが、一六六一年に明朝の遺臣を

名乗る鄭成功(母は日本人)によって追い出された。新たな支配者となった鄭は間もなく病没、息子が跡をついたが、「明」を滅ぼした「清」が派遣した軍隊によって一六八二年に滅ぼされた。下って一八九五年から五十年間、日本の統治下に置かれ、戦後は大陸から来た蒋介石総統二代による支配が長く続いた。

このように台湾は、再三にわたる被占領の体験を余儀なくされたが、近年になって自らのアイデンティティー確立に向けて力強い前進を始めている。その中心は、言うまでもなく我等の師、李登輝先生である。

先生は、台湾の伝統の正統な継承者であるばかりでなく、日本近代化の体験者であり、更には欧米文明の優れた理解者でもある。先生の高邁な史観と豊かな包容力によって異質文明の長所はことごとく台湾の根幹に吸収され、万紅(ばんこう)と名づけて千枝(せんし)に現れようとしているのである。

我々「日本李登輝友の会」会員の勤めは、それぞれの能力に応じて先生の偉業に馳せ参ずることにある。